

# 寄書

始ての寫生

後藤 階 奇

新たに文房堂で買て來たばかりのスケツチ箱を肩にかけて三脚をリユウノと振りまはして天下の畫伯オレ一人と言はぬばかりの顔をして寫生に出かけようと思したのは昨日の考へであつた。さて出て見ると昨日の勢は何處へやら、何だか耻かしい様な氣がする、然し何となく嬉しく思はれぬでもない、僕が出る時姉が「でも道具を持たつが嬉しいと見えてにこ／＼して居ます」と小さい聲で母上に語られた。僕は少しムツとした。が其の中にも少しは嬉しい様な氣も含まれていた。僕は歩みながら、頗りに姉上のさつきの言葉を連發した。

空には一點の雲なき迄でも晴れ渡っている。いつか八重洲橋を渡つて少しは眺めのよい所へ出た、此所らでよからうと道具をおろした。僕は人が居なかつたから其處にきめたのだ。

僕はこういう事を考へていた。定めし繪をかく時は人が澤山に集てくるだらう、そして中にはけなす人もあるであらう、或は僕の様な繪でもほめてくれる人もあるかもしれない、そして僕は顔を赤くするだらうと思つた處が、案の條一人たり二人たり、遂には何處から來たともなく僕のまはりには黒山の人となつた、然し僕は繪に熱心になつていたので、人がたかつても赤い顔もしなかつた。僕はうまい都合に出來て居るものかわいと思つた。そつういふ都合だから、人が僕の繪を色々に云っているのも

耳にはいらなかつた。然したゞ幼い小供か「やアきれいな繪だな」「ウマイね」といつたのをおぼへて居る、でもさすがにさういはれると何だか鼻が高くなる様な氣がした。然し其の鼻の高さはいつ迄も續かなかつた。ふと向を見ると五六人の書生が來た、僕は書生と見てあまりなぶらなければいゝがなと思つた。「實際なんだな、僕は始めて寫生に出かけた時くらい、いやだつた事はなかつたな」と一人が言つた「それも上手ならいゝがね、からなつていないときているだらう……」僕はからなつていないといふ言葉が或は僕をさしたのではあるまいかと思つた、そして次の瞬間には思はず顔に紅葉をちらした。暫く筆をおいて休む。ばた／＼といふ騒がしい音がする、振りかへつて見ると五六人の小供が來たのだ「やア寫生している」づか／＼と僕の傍へよつてくる「きれいだね」「うまいね」「やつぱり鉛筆で先きへかへておくのだね」中でも一人は紙をじろ／＼眺めて「ヤア之はあれだらうそら學校に賣つている一錢の畫用紙だらうね?! 吉ちゃん」と無邪氣な事をいふ。可愛そつうにこれでもワツトマンだぞと腹の中できげんで思はず吹き出した。三時間餘にして繪は出來上つた、まだ外に寫す處もあつたが家へ歸つて一度折れた鼻を一番うんと高くしてやるうと、そこそこにしまつて仕舞つた。

峠屋

紀州 長谷川 利行

△夕榮七彩がまげゆう樹から木へ洩れそれが前の小川にとつぷ